

## 水環境・湖沼(8) (3-B-15-1～3-B-16-2)

本セッションでは、6件の発表が行われた。湖沼の水質や底泥を対象にした現場型の調査研究に関するもので、手法、内容ともに多岐にわたっていた。

15-1は湖沼底泥における多環芳香族炭化水素の挙動についての研究で、流入河川及び道路等の負荷源から離れている湖内地点では負荷量が低くなるという湖内分布が形成されていること、雨天流出が主な負荷源となっている可能性があるということが報告された。15-2は湖沼における濁度上昇の要因を調べたもので、底泥の巻き上げモデルを用いたシミュレーションを行い、濁度上昇の原因は底泥巻き上げ増加と長期浮遊による可能性が高く、降雨時の流入増加は主要な要因ではないことが論じられた。シミュレーションを利用した手法もその結果も大変興味深いものであった。15-3は植物プランクトン由来の溶存有機物中の糖類組成に関するもので、藻類培養液では定常期以降に糖類排出が増加したこと、その組成は培養日数が経つにつれグルコースの割合が増大すること、湖水ではグルコースが卓越することはなくグルコースがバクテリアによって速やかに分解されることが考えられることなどが報告された。15-4は溶存有機物が藻類の増殖に与える影響について、AGP試験に溶存有機物を分解するための紫外線照射を組み合わせた手法を用いて評価したもので、有機物の鉄錯化が藻類の増殖に影響を与えるため、鉄の利用性の違いが藻類の優占機構に関わっている可能性が論じられた。大変興味深いものであった。16-1は28年間に渡る霞ヶ浦の長期モニタリングで得た大変貴重なデータに基づく報告で、有機物の質的变化がうかがえること、年間の水質変動が小さくなっていること、懸濁物質の増加と無機化が顕著であることなどが報告された。16-2は霞ヶ浦底泥細菌群集構造の季節変動を、分子生物学的手法を用いて明らかにしようとする試みの報告であった。今後の研究の進展が期待される。

実は、本セッションの発表はほとんどが霞ヶ浦をフィールドとした研究であった。しかし、非常に幅広い内容について、さまざまな手法を駆使した研究の報告であったため、質疑が深まってくるまでに時間がかかり、そのため時間切れとなってしまうことがあった。いずれも水環境の保全のためには重要な研究であるので今後の進展に期待したい。

(大阪教育大学教育学部 広谷 博史)